

大川小の記憶 伝える



東日本大震災で多くの犠牲者が出た名取市閑上地区を視察する「大川伝承の会(仮称)」の佐藤敏郎さん(右端)ら

東日本大震災の津波で児童・教職員計84人が死亡、行方不明となった石巻市立大川小の被災校舎がある地域で、一部遺族や有志が震災の記憶を伝え残そうと「大川伝承の会(仮称)」を立ち上げた。

これまで遺族らは、校舎を訪れる人々を個別に迎え、体験談を話すなどしてきた。今後は同会として語り部活動をし、近隣地区の同様の団体とも連携したい考えだ。

同会は22日、津波で多くの犠牲者が出た名取市閑上地区の資料館「閑上の記憶」を視察した。地区で息子を亡くした女性が、1933年の昭和三陸津波について記した石碑が地域に残っていたことを紹介。「私たちは先人の学びを知ろうとしな

石巻 遺族や有志が「伝承の会」

かったのかもしれない。記憶の伝え方が重要だ」と訴えると、メンバーらは深くうなずいた。

参加した石巻市で民生委員を務める女性(64)は「大川小は遺族や関係者が多いだけに思いもさまざままで伝える難しさがある。でも時間が経過し、その必要性をより感じる」と語った。

児童23人の遺族が石巻市と県に損害賠償を求めた訴訟は、29日に結審する見込み。大川小に通っていた次女を亡くした佐藤敏郎さん(52)は訴訟には加わらなかったが、視察を終え「あの日、起きたことを語る上では当然、事実を前提とすべきだ。裁判の行方には私自身も注目しているし、多くの人に注目してほしい」と話している。